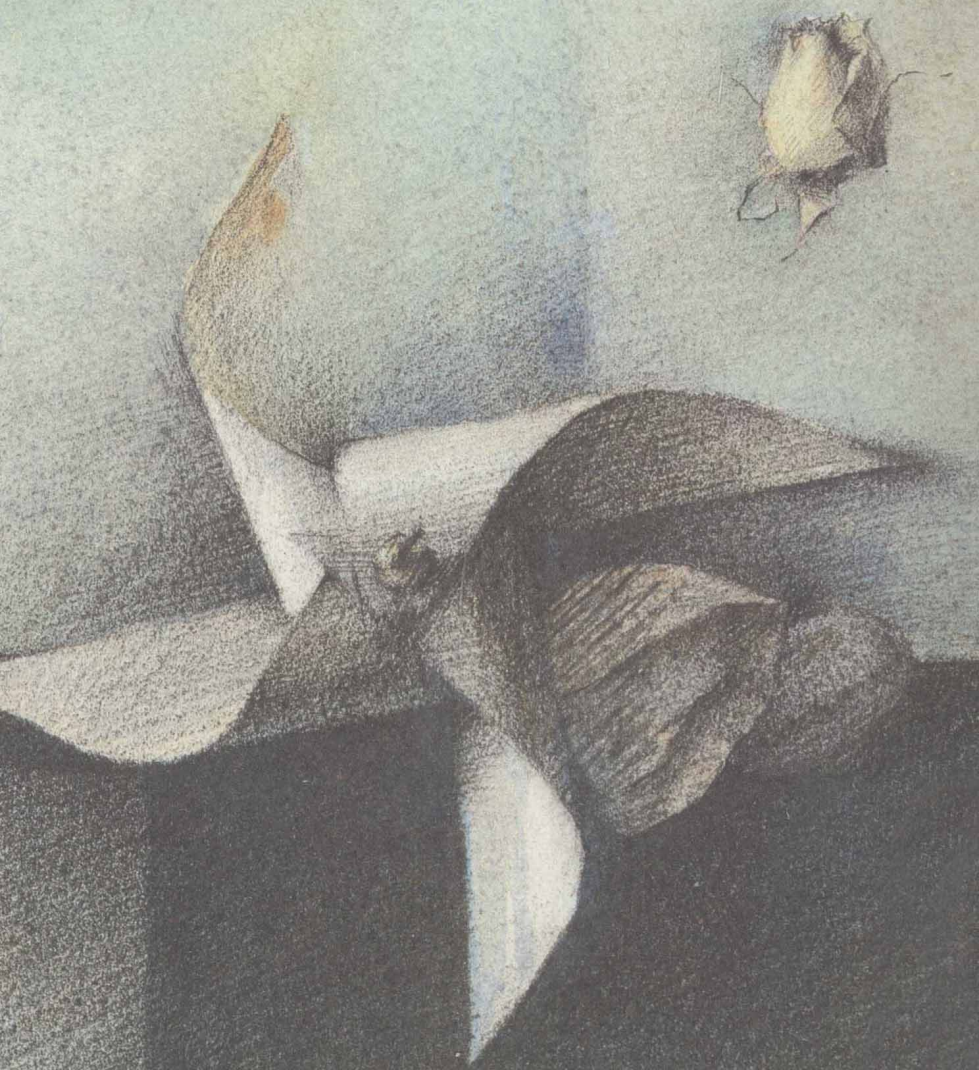
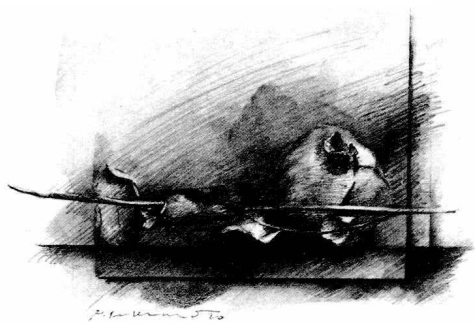


冬の手紙 黒井千次



井千次 の手紙



中央公論社

冬の手紙

九八〇円

昭和五十五年二月五日印刷
昭和五十五年二月十五日発行

著者 黒井千次

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止
©一九八〇

目次

冬の手紙 5

秋の舗石 35

夏の生きもの 71

春の病室 109

おとずれ 137

卵 161

――のための 187

声 219

装
幀
阪
本
文
男

冬の手紙

冬の手紙

寒い日であった。北風が吹くのも、霧が降るのでもなく、重い雲の下にひたすら沈黙がたまるように冷気が横たわっているのだった。街全体が地の底までこごえているのが感じられた。

暗緑色に深く濁ったお濠の水は、凍ってはいなかった。それだけに、肌にくたりとはりついて離れない、水特有の冷たさが石垣の下面に拡がっていた。

微かな風があるのか、溺んだ水に浮かんだ空のビニール袋が少しずつ動いている。コートの襟に首を埋めたまましばらくそれを見つめてから、私は信号の色の変わった横断歩道を反対側に渡った。ひっそりと私を呼ぶ声が左手のコンクリートで固められた重厚な建物から聞えていた。

思ったより早く終わった仕事から解かれ、近くにある筈の地下鉄の駅を捜すうちに、私はいつか午後のお濠端を歩きはじめていた。一度歩き出してしまふと、なぜか寒さに酔ったように私はひたすらお濠沿いの道を進んだ。そこから少しでもそれると忽ち狂暴な寒気に襲いかかられ、喰いちぎられてしまいそうな気がしていた。

その時、背後に鈍い足音がして、えび茶色のトレーニング着をつけた若い男が私のすぐ脇をす

り抜けて行った。彼がまだ二、三十メートルも離れぬうちに、紺のジャンパーに白い体操ズボンの男が私を追い越した。小さく空気が揺れて汗が匂った。それから、二人、三人と男達は気まぐれな間隔においては私に背を見せて走り過ぎた。振り向くと、お濠端を点々として男達が走っているのだった。学生なのだろうか、それとも勤務の終わった勤め人なのか。大部分は若い男達だが、中には首にタオルを巻き、しっかりと身持えをした初老の男もまじっている。競走でもなければ、個人でタイムを計っているとも思えない。なにかに駆りたてられたかのように彼等はかなりの速度で私を追い抜き続ける。その後姿はどれもひどく孤独な影を浮かべている。ふとこちらまでついて走り出してしまいそうな気味の悪い吸引力がある。それに逆って足を止め、しばしお濠に浮かんだビニール袋に目をとめてから道を渡ったのだった。

走者の環から離れると、向いの歩道のゆるい坂を私は登った。高さがないだけに余計にどっしりとしたコンクリートの量感を漂わせている建物へと歩み寄った。建造物の中には雪と枯木と墓のあることを私は知っていた。

手袋をしていても赤くかじかんでしまった指で、私は紙入れから千円札を一枚引き抜くと窓口に差し出した。岩をくりぬいた洞穴を思わせる窓口の中から、釣銭と入場券が押し出される。風で金や切符を飛ばされないように、との注意書きがガラスに貼られている。上に屋根があるとはいえ、窓口は南北に吹き抜ける風の通路に面していた。

絵を見るのは久しぶりだった。自分で描くわけでもないのに、私にはいつか絵を見たがる癖がついていた。学生時代にそのような覚えはあまりないのだから、これは勤め人になってから身についた癖であるらしかった。一枚の絵が身体の前に欲しい、とよく思った。ただ一枚でよかった。それだけを願って幾つもの美術館や展覧会の入口をくぐった。その一枚の絵がいかなるものであるのか、私にはわかつてはいなかった。けれど、私の内部の部屋の壁面に、そこだけばかりとあいている空白を私は次第に強く意識するようになっていた。あるいは、もともとそこに掛けられていた目立たない一枚の絵を、誰かに持ち去られたのかもしれない。ある時、ふとそれに気づいたのだ。しかしそれがどんな絵であったのかを思い出すことは出来ない。頭に浮かんで来るのはただ壁の空白である。

一時は勤めを休んでまで、あちこちの展覧会に出かけたことがあった。歳を重ねるにつれてさほどの熱はなくなっていたが、自分の中にある虚ろな壁面が消えていたわけではない。時折、古い傷でも痛むかのようにその壁の姿が浮かび上った。ただ、昔と違うのは、そこから目をそらす術を私が身につけるようになっていたことだろう。

ある日の夕刊の美術欄の記事が私を小さく揺すった。今、お濠に近いコンクリートの建物の中には、中部ヨーロッパから運ばれて来た一群の絵画が並べられている、と記事は報じていた。十九世紀初頭に活躍した、ロマン主義的傾向の強いその画家の絵には、枯木と墓と柩が著しく目に

つく、とも書かれていた。そしてそのことを実証するかのよう、に、混み合う電車の中で人々の頭ごしに私は天井から下げられた一枚のポスターを見たのだった。

絵画の系統がどうつながり、流派がいかに形成されるか、ということなど、私にはあまり関心がない。欲しいのはただ一枚の絵だったからだ。電車の中で見かけたポスターに私はどことなく惹かれるものを感じた。

三本の大きな枯木が雪の上に立っていた。枯木ではなく、ただ葉を落した闊葉樹であったのか。太い裸木に囲まれているやや盛り上った土の上に、一つの大きな石が置かれていた。雪をのせたその巨石は自分の腹で地面に触れているのではなかった。数個のより小さな石を並べた上に、そっと安置するように横たえられていたのだ。下の石と巨石との間には幾つかの間隙があり、そこから彼方の景観が薄くすけて見えた。重さのみに沈んでいるのではないその佇まいが、一群の石に生き物めいた奇妙な表情を与えていた。人気のない雪の山中で、石の構築物はなにかを低く呟いているようでもあった。ポスターの横に刷り込まれた字を読んで、やはり予想が当たっていたのを私は確認した。夕刊の記事で読んだ画家の名前がそのポスターにもあったからだ。

建物にはいってみると、外観とは違って意外に高い天井が柔かに温められた空気を抱いているのが感じられた。週日の午後であるためか入場者の数は多くない。いつものように、入口近くに貼り出されている主催者の挨拶や画家の略歴などの前を素通りして私は最初の部屋に足を踏み入

れた。

左手からすぐはじまる壁面に、岬を描いたペン画がかけられている。なだらかに海に向けて傾く地面には葉の重そうな樹木が茂り、その下は石の波打際となり、はるか水をへだてて切り立った崖の連続が大らかな空の下に伸びている。絵の下三分の一ほどに薄い線で方眼の引かれているのにふと気づく。一から十三までの数字も書き込まれているのが辛うじて見える。これはスケッチを拡大する折のために引かれている線なのだ、と一人の若い男が連れの年配の夫婦ものらしい人物に説明する声が聞えた。長い顔をほころばせて夫の方は満足そうに笑い、妻らしき女性は幾度も小さく首を振ってうなずく。おそらくは田舎からでも出て来た両親を息子が展覧会に案内して来たのだろう。絵画へのこんな触れ方もあったのか、と私は忘れていたものを突きつけられる思いだった。私には、親を展覧会に連れて来た記憶など全くなかったし、また息子や娘と共に絵を見るなどと考えたこともなかった。それにしても、と私は余計な心配をする。年寄りたちに見せるには、ここにはあまりに墓や柩の絵ばかりが多すぎるのではなからうか――。

二つ目の部屋では、光輝く金色の壮大な額の中、山の頂きに長身の十字架が高く小さく立てられていた。祭壇画という説明がつけられていたが、険しい岩と縦の木の上に夕空を背景にして細く立つ十字架は、いかにそこに磔にされた尊い姿があるとはいえあまりに劇的で、かえってこちらの折る気持ちを阻むような気がしてならなかった。親子連れの三人はものも言わずにしばらく

その祭壇画を見上げていた。

ポスターにあった巨人塚に出会ったのは、更に少し先の部屋でだった。額縁に収まった実際の絵は、電車の中に下っていたものより遙かに地味で静かな表情をたたえていた。

それから、私は霧に煙ったような墓地の入口に向き合って立った。掘られたところだけ土が露出している雪の墓地もあった。教会の廃墟にも足を入れ、また船出したばかりの箱船に似た姿で、墓穴に渡した四本の木の上に浮いている柩も見た。

山や海の風景画もあるのに、私はやはり墓地や柩の絵に惹かれた。人のいないそれらの絵に、かえて妙に生臭い人間の匂いがした。

進むうちに、部屋のどこかで時折澄んだ鈴の音がすることに気がついた。振り向くと、若い女の肩から下げたバッグのベルトに、紫色の紐のついた球形の鈴が二つつけられている。なにかの拍子にそれが驚くほど高い音を放つのだ。部屋の空気を切り、笑うように響く。絵の中に半ば溶け込もうとする意識をいきなり現実に取り戻す意地の悪い力を備えている。万年筆や写真機の使用は禁じられているが鈴は禁止されていないのだから止むを得ない。ブーツをはいた薄い顔のその女性からなるべく離れて歩こうとつとめる。しばらくすると、また突然背後で鈴が笑うのだ。

部屋の隅に薄暮の海岸を描いた一枚の絵がある。小さな焚火をしているのだが、前景に立っている人物の姿が暗くてはっきりしない。その絵の前に来ると、多くの観客は身体をのり出して画

面に顔を近づける。絵のすぐ下に置かれた椅子に、グレイのユニフォームを着た小柄な中年の女性小さく坐っている。人々が絵に顔を寄せる度に、彼等の息のかかるのを避けようとするかのように彼女は顔を背けて部屋の入口を見る。その膝にのせられている赤い毛糸の膝掛けが、私の中に寒さの感触を呼び戻す。この建物の内に今あるのは、ほんの仮初の温かさでしかない。

それでも、出口に近づくにつれて少しずつ観客の間の緊張がゆるむのか、押し殺した声の会話が時々ふと抑制を失って高く浮かび上がることがある。大学生らしい女の二人連れが、二羽の白鳥を描いた絵の前に立ってしきりに首の線を宙になぞりながら、突然むせるような笑い声をあげる。慌てて口をおさえた指の間からいつまでも声が洩れ続ける。一度出口まで到達したらしい若い男女が、そのまま出るのは惜しくなったのか手をつないでもどって来る。結婚してまだあまり年数が経ってはいないと思われる夫婦が、一本の枯木のスケッチの前で肩を寄せ合ったまま言葉を交すのが目にとまる。ほとんど枝らしい枝もないその木は、苦しげに右に左にと身を振りながら天に伸び、頂きのあたりに辛うじて梢と呼べそうな細い小枝を拡げている。くねる幹からは瘤に似た黒い塊があちこちに突き出し、そのまわりにだけ縮れた毛のような微細な枝が生い茂っていた。男がなにか囁き、女の肩が後ろから男の背を突きあげた。女が口を動かすと、男は肩を女の肩にすりつけた。二人は短く語っては声をたてずに笑った。夫が絵の前を離れようすると妻が服の裾を小さく引いてとめ、妻が歩き出そうすると夫は相手の腕に手をかけてとどめた。二人が何

を話しているのか、私にはすぐ見当がついた。夫婦の間だけに生れる猥らな空氣がそこにあった。家族の中で唯一の性關係を許されているものの密やかで厚顔な触れ合いが感じられた。

私が始めてそのような男女の情の取り交しに気づいたのも、かつての展覧会の会場であった。なぜか、その時も夫婦ものらしい若い男女は、変哲もない静物画の前で肩を突き合っていた。背後から、彼等を刺戟するなにかそこにあるのかを探ろうと私は目を凝らしたが、遂に正体を発見することが出来なかった。それでいて、彼等の身のまわりにはいいようもない湿った性の匂いがあつた。その日、美術館を訪れた私は一人ではなかった。連れを振り向いて、時折私は露骨な言葉や口にした。相手も低く笑いながら、敏捷に、嫺やかに身体を返した。けれど、私達のそのやりとりはあまりにあからさまになるか隠微になるかのどちらかで、若い夫婦の漂わすあの猥褻感とはほど遠いものだった。

枯木のスケッチの前にまだ立ち続ける男女を残して私は足を進めた。人々の動きは、前方にある瀧の接近を感じた流れのように、明らかに出口に向う表情を用意しはじめている。これで終るのか、という淡い失望が私を捉えていた。やはりここにも捜している絵はありはしない——。壁面を渡って絵から絵へと移ろうとした私の前を、ひらりと白いものが飛んだ。飛んだというより、斜めに落ちたのだ。床に落ちたものを拾い上げ、気づかずに歩み去ろうとする人に、落し物ですよ、と声をかけるのはごく自然の行いである筈だった。左手の壁の前には一人の背の高い